
大陸の西と東

ddds

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大陸の西と東

【Nコード】

N7618Y

【作者名】

ddds

【あらすじ】

人類が太陽系外宇宙へ出るようになって約一世紀
日本の移民船団が出航直後に遭難。たどり着いた先は魔法によって形成された権力が支配する惑星、ハルケギニアだった。ハルケギニアに宇宙文明現る。

はじめに

まず始めに言っておくべきことは、これは

『技術史な使い魔』の書き直しです。

書き直しと言っても全く同じではありません。

多少内容が変更されています

技術史な使い魔は現在非公開になっております

読みたい方は・・・私までメッセージお願いします

ただし、多大なネタバレとショボい文章に覚悟しておいてください

また、ここの感想でネタバレをした方にはもれなく

赤軍兵一日体験インスターリングラードをプレゼントいたします

もちろんレビューもです。

更に、特定のアニメやゲーム等のネタ、キャラクターを使用する場合がありますが、

基本はゼロの使い魔ですので、ご存じない方も安心して読んでいただけると思います

ただし、知っておくと理解がしやすいものもあります。

以下がその一覧です

アニメ 攻殻機動隊

アニメ 超時空要塞マクロス（マクロスFのいいかも）

映画 コマンドー

その他増えることもあるかもしれませんが、
知らない方でもなるだけ分かるように書いていきたいと思います。

ただし、最低限の軍事知識は知っておいたほうがいいかもしれません
一応説明はするつもりですが、分からないかもしれません。

まあグダグダと長くなってしまいましたが、
最後まで読んでいただけると幸いです

最後にひとつ

原作は読んでいません。

アニメとwikiだけを頼りにして書くと思います

……まあ今のところそれで不自由は無いですし。

はじめに（後書き）

初期特典として技術史な使い魔のアドレスを密かに表示

`http://ncode.syosetu.com/n6712w/`

数週間で消えます

ブローグ

世界初の商用核融合炉の完成から数世紀、
人類の使うエネルギー量は限界に達しつつあった

日に日に増大する使用エネルギー量

世界各地に増え続ける核融合炉

$3\text{He}-\text{D}$ の核融合炉のために月に都市が作られ
ヘリウム3を採掘しているが

その量は日々増大し、人類は木星から持って来るといふ決断をするも
木星までは非常に遠く、また事故也多発し、

安定的に供給はできなかった。

だがエネルギーを手に入れるためには無理でもやった。

そして人類は最後の手段に出る。

巨大な核融合炉である太陽の放出するエネルギーを全部集める

『ダイソン球』というものを作ると決めたものの

あまりに莫大に必要な資源、

超長期に渡る工期

完成は500年後となってしまうた

20世紀後半の核融合炉の完成からというものの、
科学はそこまで進歩せず、進んだものと言えは

生物、素材、航空宇宙系の技術ばかりである。

同時に食料の不足にも悩んでいた

人類は地球の循環システムに影響を与えない最大限の農地を開拓し、先進国が莫大な資金を使い、砂漠を緑化し、足りない分は工場で作

り、土を食べる研究をもし、ついに糞尿にすら手を出しても人類には食料が足りそうになかった

地球の総人口170億人

核融合炉用のヘリウム3の採掘施設を中心とする月面都市の総計が2000万人

テラフォーミングの最終段階にある火星の人口が4億人

金星の高高度で飛びながら金星のテラフォーミングを行う浮遊都市というより飛行都市連合が

4000万人

木星の衛星系や土星、その他の惑星の衛星軌道上で資源回収をしている前哨基地が

120万人

が、それは恒星外移民が始まるまでの話だ
100年程前、日本において超高速航行法が確立され、
惑星外移民を始めてからは更に恒星外に幾つかの居住可能惑星や
テラフォーミング可能な惑星が発見され
太陽系外の人口も50億人に達し、

人類は銀河系全体にその勢力圏を広めていった

そしてきつかり100年目になる今日

日本国第22次移民船団「瑞鶴」は未だ未知である銀河の中心方向
へ向けて

旅立とうとしていた・・・

福島県は双葉市

かなり昔の話となるが、「原子力発電所」なる原始的発電所の事故
により

人が住めなくなった

しかしその後ナノマシン技術の進歩により放射性物質の回収が容易
になるも、

元の住人はすでに大半が死亡していたため、結局無人地帯に
そこに宇宙港が建設されたのだ

周囲30キロは無人だったため騒音被害も発生せず、
それまでの宇宙港だった種子島に比べて首都圏にも近いため、
世界一の宇宙港として大いに発展した

移民の開始からは複数の大規模ドックやその付随工場が建設され
人口は300万にも達する都市になった

無事出港式を終え

超大型居住艦 1

大型居住艦 2

大型製造艦 2

環境艦 6

小型製造艦 4

娯楽艦 8

戦闘艦 1 2

多目的艦 2

からなるこの船団は

日本国の名を掲げてはいるものの

実態は独立国家であり、法律も行政も日本とは全くの別物であった
大統領制だし、物資統制はかかることもあるし、

船団内総動員法、人口制限法すら存在するのだ

現在の人口は 1 0 0 0 万人 5 0 0 0 万人まで対応できるようにな
っている

全ての艦で環境システムが共有されていて、

最低でも環境艦が 2 隻ないと環境システムは崩壊してしまう

全長 5 0 キロにも及ぶ船団は、2 時間かけて大気圏を離脱

その後月軌道を通過し超光速航行へ移る・・・が

主観でわずか一時間後のことである

「何があつたんだ たたき起こしたからには何かあるんだろうな」

大統領になった男が中央管理室に現れた

どうも寝ていたらしく、髪はボサボサでしかも寝間着だった

それほど重要なことだということだ

そのマヌケな姿を見たものが

船団の最高権保有者とは誰も思っまい

「実は……」

画面を監視していた男が何かを言いかける

「なんだ 正直に言ってくれ」

「突然空間が歪んだんです」

「当たり前だ 歪めて飛んでいるんだろう」

超高速航行と言うのは

引力を特定の方角へ出すという

未知の常態にある物質に電荷をかけて

空間を歪ませると言う

正直、結果は分かるけど何がどうなっているのかは分からない
という技術なのである

「歪んでいるというところじゃないですね 空間に穴が開いている
んです」

「なん・・・だと・・・」

空間に穴がある

この現象は特殊な状態でしか発生しない

ブラックホールである

非常に強力な重力により空間が無限に落ち込んでいるので離脱できない。

「球状の穴」である

「そんな馬鹿な 地球から50光年も離れていないんだぞ」

「ブラックホールではないようです。引力がないですから。ですがもう手遅れのようなですね・・・」

「何・・・?」

大統領が周りを見ると

超光速航行で周りは真っ黒だったはずが星が見えるようになっていた

「というか俺を呼び出す必要はあったのか? 電話のほうがいいじゃないか」

「いいえ 穴が発生したときには既に手遅れでした」

しかし空間の穴に入り込むなどということは前代未聞であり、何が起るのかわからない状態だった

ブラックホールならすぐにバラバラになるのだから

だが彼らはすぐに理解した

「ここは故郷から遠く離れた地」であると

「報告を始めてくれ」

大統領が緊急閣議とドアに書かれた会議室に入り各大臣に報告を要求する

最初に天文大臣と書かれた席の男が手元の資料を読んで説明し始める

「現在 無人・有人探査機を全て使って星図の制作を全力で行っておりますが、半径10光年の恒星系の星図が完成しました
これがその資料です」

「これは・・・」

「どうということだ・・・」

会議室が騒がしくなる

「ええ。間違いありません。太陽系です。」
天文大臣は続けて言う

「我々のよく知る太陽系のように水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星。

それぞれによく似た星が確認されています」

「だが我々の太陽系ではない」

「その通りです。いかなる電波も宇宙船も確認されていません」

「で、我々が一番知るべきなのは・・・」

「勿論地球です。次の資料をご覧ください」

その時 また会議室が騒がしくなった

「この恒星系の第三惑星 仮に地球と呼称しますが、地球にはご覧のように適度な大気と青い海が確認されています」
それは無人探査機の撮影した画像だった

青い大気に包まれて茶色と緑の陸地を囲むような青い海
間違いなく地球だった

「ここまで似ているのに・・・」

「ええ、月が2つなんです」

天文大臣は続けて言う

「この二つの月は本来ならそれぞれ引かれてひとつになるはずですが、近すぎるんですよ。」

「どうしてそんなことに？」

「分かりかねますし想像も予想もつきません。正体不明の力としか。」

「その力の検討は付いているのかね？」

「いえ、全く想定できません

今後はこの恒星系第三惑星の観測を強化すべきかと」

「それで問題ないしそれ以外思いつかないな」

次に外務大臣が話す

「まずこの状況から言つて、

地球との連絡はほぼつかないと考えていいでしょう。

また、他の移民船団などとも連絡が付きそうにありません。」

「すべての周波数帯を監視するほかないな」

「それが懸念かと」

が、それは日常の任務なので特に代わり映えはない

次に環境大臣が話したす

「船団全域において循環システムは良好。食料備蓄も36ヶ月分はあります。」

「つまり異状なしということだな」

その他の大臣の報告も終わり、本題に入っていた

「あの星をどうするかだな・・・」

「とりあえず距離が2光年があるので火星軌道あたりまで入って近くから観測ですかね」

「それ以外考えられないな」

なんせ何年も旅をした先で見つけるつもりだった移住候補の惑星が
今自分たちの目の前にあるのだから

移住を主目的としている以上、それしか考えられなかった

2光年は目の前と言えないかもしれないが

数十分で行けるならそれは十分目の前と言える

「あと市民に伝えるかどうかだな・・・」

下手に発表して混乱してもらっては困る

強硬派が出てきて

『今すぐ地球に降りるんだ!』などと言われてはたまらないからだ

「とりあえず今は隠蔽ということだ」

「まあ明日までには嫌でもバレるだろうな」

幾つかの光学望遠鏡は民間のものが存在しているからだ
趣味に使っている人もいるし仕事で使っている人もいる
超光速航行中止については『機関の故障』にしておいた
出発早々故障しては不安がられるかもしれないがパニックにな
るよりはマシだった

だが、開始早々の閣僚会議に不信感を持つ人も少なくなかった

次の日

緊急の大統領府発表となり、事態を説明することになった大統領は混乱しつつあった

単純に『どう説明するんだよこれ……』ということである

『えー……結論から申しますと』

『地球との通信が途絶しました』

その時

時間が凍結した

街全体の時間が止まったように見えたのだ

ありえないことだが、人間の主観で止まったように見えるならそれは止まっているも同然である

次の瞬間

記者の質問攻めになった

『どういうことですか？説明してください』

『地球に何が起こったんでしょうか』

というよりパニックだった

電話網はパンクし、ネットもサーバーダウン

危惧していたことそのものだった
当然だ。宇宙広しといえど安心して帰れる星はひとつしかないのだから

「とりあえず話を聞いてください」

続けて今置かれている状況、
そして今後の予定などを説明した

ある記者が言う

「我々は地球に帰れるんでしょうか？」

「分かりません。ですが、なくても帰れる場所を作る必要があります」

「つまり将来的に第三惑星への揚陸を行うと。」

「そういうことになります」

ですが今後の調査内容によってはそれが大幅に遅れたり、
最悪降りれない可能性もあります」

それを最後に記者からの質問は終わった

早速超光速航行で火星軌道まで移動することとなり
わずか30分のワープを行った

その先にあつたのは

間違いなく地球だった

肉眼でもわかる。自分たちの知っている地球だと

某カップ麺のアニメみたいに赤かったりしない。

星戦争のコルサントようにビルで埋もれているわけでもない

間違いなく青い星がそこにはあつた

その日のうちに地球低軌道に向けて多数の人工衛星が放たれ、その日の行動は終了

大統領は寢床でこう思った

「ああ……めんどくせえことになったなあ……」

探索と移動を繰り返しているうちはたいしたことないと思っていたのに

初日からあの状態じゃあ体力が持たないし、

今後仕事も山積みだと思ふとかるく憂鬱になる

明日は昼まで寝よう。いつそ明日全部寝過ぎしちゃおう

子供のような発想にまで至ってしまう

それほど先が見えないのであつた……

つづけ

プロローグ（後書き）

はい。ということで書き直しはじめました。

最初のあたりは不満が無いのでほとんど技術史な使い魔の転載です

来年の夏までには終わる・・・かな？

今でも思っけど最初のあたりってかなり不要なんですよね
何で書いたんだろうか

プロローグ2

閣僚会議と書かれたドアを開けて定位置につく
既に自分以外の全員が揃っていた

「さて、今日も報告してもらおうか」

全員の視線が一人に集まる

まず全員が見つめる先には「天文大臣」

「えーとですね・・・更に理解し難い事態に陥っています」
「どうということだ」

「手元の資料に詳細が・・・」

その時、会議室が騒がしくなるどころか一瞬で凍りついた

理解できなかったのだ。自分たちの目の前にあるものが

そして数十秒の沈黙の後

一人が口を開いた

「地球だ」

「間違いない。これは地球だ」

例の第三惑星の地理情報であった

ユーラシア大陸があり、その南にアフリカ大陸、大西洋を挟んで北と南に両アメリカ大陸
間違いない自分たちの知る地球であつた

「偶然にしては異常です。ですが、少々おかしい点も存在します」
「というと？」

「次のページを御覧ください」

今度は会議室が少しざわめいた

「ええ、よく似ているようではなにかが違うんです」
それは自分がよく慣れ親しんだ東アジア、日本周辺によく似た地形
図であつたが
何かが違う

「朝鮮半島が存在しないんです」

朝鮮半島が根こそぎ、というわけではないが
すこし出っ張っている程度で
残りは殆ど海の底。

「また、北欧のスウェーデンとノルウェーに当たる部分も存在しません」

北海が非常に広いのだ

「イギリスが色々おかしくないか？」
「ええ、土地全体が標高1000mになります」

そう驚くのは当然だ

人類は既に地球外生命体を発見していたが、どれもが細菌や植物の類で、

動物も少数存在するが地球では考えられない形状を指定たりしていた『人間』のような知的生命体も可能性がなかったわけではないが、人類と同じような形状をしている可能性はほぼゼロで、それこそプレデターだのタコ型だのなんでもありえたのだ

『人間』がいる

それは外見上であるが、自分たちと同じ見た目をしているということだ

ありえないことが次々と現実となる

これから起こることが全く読めず、全員の頭は壊れかけていた

天文大臣は続ける

「また、文明もあるようです」

ΩΩΩΩくな、なんだってー

まあこれはそこまで驚くことでもない。

地球に非常に良く似た惑星に

人類とほぼ同じ知的生命体。

文明は確実に発生する。

「文明があるということは我々に気付いている可能性も・・・」

全長50キロの物体が火星（仮）付近に存在しているのだ

宇宙に出れなかったとしてもフォボスやダイモスを1800年代には発見されている以上、

見られている可能性があった

が、それは非常にまずい

『宇宙人の侵略だ』などと騒がれてはたまらない

「いえ、文明のレベルは近世中期程度、天文学があるかどうかすら怪しいです」

「そうか・・・で、どーすんのよこれ」

大統領がその役職らしからぬ言い回しを始めると

「文明の存在は確認できましたが、不明な点が多いんです
現在まとめている不審点は」

船が陸上にある

イギリスが海に面していない
というか浮いている

文明はヨーロッパから中国にかけてに存在する
中東周辺の砂漠がトルコあたりまで進行している
その他の地域に人間が居るかどうかは不明

「以上になります」

「文明が存在している以上、まず相手のことを知らなければなら
ない・・・」

「我々の故郷にもなりうるわけですからね」
天文大臣は続けて言う

「東アジアの島国には文明も存在せず、人間も存在しないと予想さ
れます」

「つまり・・・日本のことか」
「その通りです」

「つまり降りれと。」

「とりあえずはそうするべきでしょうな」

「とりあえず今後の方針も決めなければならぬ
勿論我々だけでは無理だ 専門家や学者も呼ばないとお話になら
ない」

「そうですね では明日また招集をかけてまた明日決めるということ
でよろしいでしょうか」

「それしかできそうにないな」

他の報告は聞かずに開きになった

大統領はつかれていた

というか他の大臣も疲れていた

理由は簡単だ

『リアクションに疲れた』のである

文明が存在していて、人間も存在している

非常に面倒になる内容であった

現地に人間を派遣する必要もあるし、

最悪

というか当然なのだが言葉も通じないかもしれない

非常に面倒である

しかもそれが変な宗教でまとめられてたらもう大変

その力を利用して団結したり、

意思疎通ができて宗教的な禁止事項に触れて何が起こるのかわか
らないし

複数の宗教が存在していたり、

精霊崇拜のような原始的宗教ならいいのですが・・・

非常に面倒なのでいつそ焼き払いたくなりますが、
それはできない

「月その他の天体を含む宇宙空間の探査及び利用における国家活動
を律する原則に関する条約」

略して宇宙条約が1967年に国連で採択され、

2031年に改正案が採択された

この頃になると月面を含める太陽系内の惑星、衛星への植民が本格的な段階となり、

国家間でそれに関する条約が制定された

そして月面植民が始まった2061年

「月その他の天体を含む宇宙空間の探査及び利用における国家活動及び企業活動に関する条約」
が制定された

略して「新宇宙条約」である

これは民間での宇宙空間活動も記載されたものである

この頃になると民間でも宇宙ステーションを打ち上げるようになる
いや、「打ち上げる」は古い表現となった

SSTOやマストライバーが実用化されたからだ

そしてつい最近

120年ほど前

初めての外宇宙移民船団が造船段階に入った頃に採択されたのが

「月その他の天体を含む宇宙空間の探査及び利用における国家活動及び企業活動に関する条約」

改正案が採択された

これは今まで国家プロジェクトであったスペースコロニーや

惑星移民などの計画を民間でも行えるようにするための改正案だ

これには新しい内容である

「地球外生命体が存在する星においての条項」が存在する

この内容は

地球外生命体（以下生命体とする）の存在する星において、

植民を行う場合、生態系を破壊してはならない

または、破壊を最低限にしなければならない

よって人間の居住エリアと生態系を保護するエリアで完全に隔離することを推奨する

人間の居住エリアは生命があまり居ないところにするべきである

知的生命体が存在していた場合、

彼らと意思疎通が可能であれば話し合いを持ち、

意思疎通が不可能であれば何も言わずその場を立ち去れ

なるべく干渉してはならない

ただし正当防衛は認められる

また、知的生命体が宇宙での活動が可能な場合、とりあえずは意思疎通を図りつつ

地球での国連会議が終了するまで動いてはならない

ここでの知的生命体の規準は同じ種族同士で同じ情報を共有できるを規準とする

などと記載されている

つまり殺生は禁止ということだ

だが今回は場合が場合だ

事実上の国際法だとはいえ、

地球とも連絡が取れず、

また、他の移民船団や植民星にも連絡がつかない

しかもそこにあるのは地球によく似た星、

更に人間ときた

もう例外的な動きしてもいいのではないかと思っくらいだった
考えるのすらだるい

寝よう

早く寝よう

彼らは日が暮れないうちに寝てしまった

出発4日目の朝

未だ商店街も開店しない様な時間に各専門家や学者がひとつの部屋
に集まった

場所は大統領府である

総勢120人

これでも代表だけを集めたのである

移民船団というのは20万人の専門家とそれを支えるその他980
万人で構成されている

人類文明の全てを継承するためのシステム

仮に地球が滅びてしまっても消えた文化や歴史が存在しないように
ということである

よって地球上のあらゆる学問の専門家が集まっている

また、この会議は移民船団はもとより第三惑星の行く末を決める大

事な会議である
よって全艦に生放送である

「とりあえず天文大臣。今日報告すべきことはあるかね」

「また面倒なことになるのですが・・・」

「おいまたか・・・勘弁してくれよ・・・で何なんだ」

「由来不明のエネルギーです」

「つまり具体的にはどういうことだ」

「第三惑星の地表面から由来不明の強力な電磁波が検出されています」

「そのどこがおかしいんだ」

「エネルギーの由来が不明なんです」

「それは今後の調査でわかるだろう 他にないかないか」

「地球のエネルギー収支が不釣り合であることが判明しました
「詳細を」

「我々のよく知っている地球は太陽から約1億4000万キロ離れています、

この第三惑星は太陽からの距離が約1億2000万キロなんです」

「つまり、太陽から受けるエネルギー総量が我々の地球に比べて多いということですね」

学者の一人が言った

「そうなんですがおかしい点が複数存在します
まず、地球と同じように温帯域の気温が15 - 30度で安定して
います」

また、その他のエリアも地球とほぼ同じ気温です」

「もつと暑くなるはずなのに気温が低くて、
だがその反射や放出したエネルギーはそれほど多くない」

「その通りです。」

地球上でエネルギーがどこかへ消えてるんです」

場が騒然となった

「エネルギーが消える」

ありえないことだった

地球上でも利用可能なエネルギーは使用した後大抵、熱に変わって
空気中に拡散する

利用不能になってもエネルギーは不滅だった

エネルギー保存の法則を破壊してしまったのだ

「じゃあ先程の電磁波になったのでは？」

「我々はそう考えています」

「だが太陽光から電磁波に至るまでの間が説明できない
想定もできないしな」

「とりあえず今後の調査で調べるといいうことで」

大統領が正面を向きなおして言う

「さて、本題である第三惑星上の文明への対処だが・・・」

ある学者が言った

「社会学から言わせてもらえば相手を知らないと何も出来ないでしょう

こんなありえない話が色々湧いて出てくるこの状況じゃ

より詳細な情報がないと話しにならん」

場に意義を唱えるものは居なかった

大統領は続ける

「とりあえずは情報収集だが、どうやってやるかが問題だ。

突然空から数十キロもあるつかという鉄の塊が降ってきたらパニックどころじゃあないでしょう」

地勢学者が言う

「文明は大陸にしか無いというのであれば、

降下地点の東アジアは島国から来たということにすればいいのでは？」

歴史学者が

「だがそれでも文明度の差が大きいと何が起こるかわからん

この頃は未だ現象の科学的な見方というのがないはずですから

近世末期頃は未だ錬金術をしていたはずです」

化学者が言う

「確かに迷信が多い状況では冷静に物事を捉えられる人も少ないでしょうし

そもそも産業革命以降の人たちでもオーバーテクノロジーの塊が突
然来れば
パニックになるでしょうな」

歴史家が言う

「そもそもこの頃は航海時代になるあたりだ
外に出て行かないということは何かあるんでしょう」

大統領がそれを聞いて

「つまり我々も大陸にたどり着くのに時間がかかったということに
すればいいんですな」

「そういうことですが、技術水準をどの程度にするかが問題です」

「確かに・・・航空機を知らない人が航空機を見たとき『怪鳥だ！』
などと言ったそうですし、
航空機がないので航空機よりも前・・・」

「近世末期とほぼ同じなのでそのすぐ後の産業革命前後の技術では
どうでしょうか」

「となるとどのあたりになる？」

「蒸気機関、鋼鉄、憲法、共通規格あたりかと」

「つまり『黒船来航』をやればいいんだね」

「ちょうどそのあたりになりますね」

「その他の『設定』はどうでしょうか」

「国名は日本国でいいでしょう。」

ヨーロッパに出来なかった理由は喜望峰の未発見及び中東の砂漠に阻まれた

中国大陸へいけない理由は・・・まあ後で考えましょう
その他の内容は専門家の方々に考えてもらいましょう」

どうせ大した内容はない

宗教制度や経済体型、政治制度くらいのものだ
大して時間はかからないだろう

かくして、第三惑星の未来の大筋を決める会議の第一回は30分足らずで終わってしまった

そのあと大統領府では来週中に第三惑星への揚陸を行うと発表
移住都市一つ目の計画である「新東京市計画」も同時に発表された

移民船団の人間はまだ知らなかった

この星にとんでもない技術体系が存在することを・・・

出発から2週間目

ついに揚陸の日となった

それまでにあったことといえば

黒船船団用の船16隻の製造開始くらいだ

受注した造船所曰く「今更こんな古代の船を作るとは夢にも思わなかったよ」

だそうだ

連中は木造艦ばかりみたいなので鉄甲艦ならまあそれなりに驚くだ

ろう

我々にとって連中の文明レベルはもはや化石レベルである
しかしいくら文明度が低いからと言って
どう動こうにしろ情報がない
情報がないと動きようが無い

とりあえず揚陸してから考える
これからするべきことが多すぎて憂鬱だ
どうせ移住する惑星も見つからず一生が終わるだろうと思っていた
のに・・・

まったくもってなんてこった
大統領になんぞなるんじゃないかった
地上で普通に官僚やってりやよかった
そう思うここ数日の大統領である

まず揚陸前の第一段階
静止軌道への侵入は既に終えている

見つかったとしても大した騒ぎにはならないだろう
第二段階低軌道侵入を二時間前に終え、
ついに大気圏突入へのカウントダウンに入っていた
太平洋に着水した後に東京へ向かうこととなっている
大気圏突入するからって大したことはない
船自体が巨大なのでそれほど揺れないのだ
人工重力もあるのであまり関係ない
寝ていたらいつの間にか地上もありえるのだ

大気圏に突入を開始

すこし浮いているような気分になるが、それも30分ほどで終わるのだ

こうして船団のすべてが太平洋に着水
揚陸作業と地質調査の船が出ていった

その他にも大量の航空機や資材の揚陸船が出ていく

今は暇だが今後が地獄だった

大陸の情報を手に入れたらすぐに対策会議を建てなきゃなんのだ

その後数時間たって

幾つかの戦闘艦が喜望峰に向けて飛んでった

その後ろを追いかけるように16隻の黒船船団が東京湾を出ていった
その乗員や貨物の内容などは

人間が62人、あとの1000人以上の乗員はすべてアンドロイドだ
効率良く情報を収集するためと、諜報機関から割ける最大人数であり、

他の調査機関なども人手が足りなかった

よってアンドロイドを投入することになったが、
連中にバレることはまず無いだろう

既に「電腦化」というのが衰退しつつある現在、

過去に義体化などの技術も高度化しており、

更に人間と同じような感情を持つ思考チップとプログラムも存在していた

どこの誰が書いたのかはわからないが、突然ネットにぶちあげられた代物らしい

そんなのを信用したくないが、幾度も書き換えられつつ、基本は今も変わっていないらしい

体の造形技術も2010年頃には既に高度化しつつあったので義体もすぐに違和感なく作ることができるようになった

そんなテクノロジーの塊を理解できる人間がああ文明レベルで居るわけがないし、

居たとしても詳細な構造や理論はわからないだろう

『行き過ぎた科学は魔法に見える』

誰が言った言葉かは知らんが

全くそのとおりだね

船の方はたいしたことはない

1800年代末期の蒸気機関とスクリー式の推進
前時代の遺物そのものだ

あるゲームに例えれば

地図なくして戦争はできないし、スタックもないうちに戦争などできない

未知の技術を持っているなら尚更だ

とりあえずは諜報ポイントに資金を割いてスパイ経済国家を目指す
ことしよう

本当に未知の技術を持っているならばの話だが

3日後

黒船船団はマラッカ海峡を通過したと報告があった

戦艦は喜望峯に到着

補給拠点の建設を開始したそうだ

予定なのでどうでもいいとして今度は物理学や化学や生態学のほうが騒がしい

「未知の物質を発見した」だの

「地球の生物によく似ているが色々とおかしい生物を発見」だの

「遺伝子含める基礎生態系が地球とほぼ一致していることを確認」だの

「人間によく似た生物を発見するも襲って来たので射殺 サンプルとして回収」だの

大量の発見があったようだ

いちいち俺に言う必要あんのかよそれ

学会内だけにしてる

だが間違いなく彼らの瞳は新しい玩具をもらった子供のような

好奇心に満ちあふれた目をしている

ここ2日寝ていないそうだが疲れ知らずのようだ

これから毎日何かしらの発見があるんだろうな……

だが俺には関係ない

まず諜報部隊がヨーロッパにつくまでは待機

12時前に寝てしまうのだ

中国対策は、専門家連中が『設定』を考えてからでも遅くない。

なんせ近いがゆえに何故来れなかったのかを考えるのは難しいのだ

つづけ

プロローグ2（後書き）

とりあえず今回までは『技術史な使い魔』のほぼ転載
次回からはかなり変わってきます

各国家詳細

この二次創作では原作と異なる地理設定を用いています
現実、地球と同じ地理を用います。
理由は簡単。戦争には地理状況がないと考えられないところが多すぎるからです

というわけで各国の地理と適当な説明一覧です

『西部ハルケギニア』
ガリア王国

地理

スペイン＋ポルトガル＋フランス＋スイス＋北アフリカの一部
ハルケギニア大陸西部の大国 ガリア王国

政治制度は神授王権と封建制。
人口は5300万人
首都はリュティス（地球でのマドリード）

トリスティン王国

地理

ベルギー＋オランダ

政治制度はガリアと同じ

首都はトリスタニア（アムステルダム）

人口は400万人ほど。

帝政ゲルマニア

政治制度は絶対君主制

ハルケギニア大陸西部において、最も中央集権が進んでいる

地理

ドイツ＋ハンガリー＋オーストリア＋チェコ＋スロバキア

人口は7600万人。

首都はヴィンドボナ（ウィーン）

ロマリア連合皇国

政治制度は神権政治

都市国家の集合体であり、その中心（首都）はローマ

地理

イタリア＋スロベニア＋クロアチア＋アルバニア＋北アフリカの一部

人口は2600万人

アルビオン王国

政治制度は神授王権

浮遊大陸であるため標高が高く、気温が低い
そのうえ土地も痩せ細っており、さらに日照条件が悪い
等の理由で常に食糧問題を抱えている

地理

グレートブリテン島

人口は700万人ほど

首都はロンドン

ミケーネ国家連合

オリジナル国家。名前はギリシアの歴史より拝借
都市国家の集合である

かつてはロマリアの一部であったが、神官の腐敗がすさまじく、
首都一極主義である神権政治から逃れるべく独立。

政治制度はメイジと平民の二議会共和制。

ハルケギニア西部で言う『辺境』であり、

メイジの権力も数も他の国に比べると非常に少なく、
共和制がうまく成立している

その代わりに国家としては弱いため都市国家同士の関係は非常に深
く、

また、平民に軍事訓練が行われており、非常に強い

地理

ギリシャ

人口は700万人

首都はアテネ

都市国家イスタンブール

名前そのまま。イスタンブール。

政治制度は民主制。

都市より東はエルフの住む乾燥地帯『サハラ』

都市より西は系統魔法使いの権力世界『西部ハルケギニア』

その間にあるこの都市は、多くの商人が行き来する交易都市。

東からの品物が欲しいときはイスタンブールへ行くといい。

人口は20万人ほど。

小国家群

地理

ブルガリア、セルビア、ルーマニア

このあたりは小国家がいくつも点在している。
ただし、北部はキエフ＝ルーシの属国が殆ど。

キエフ・ルーシ大公国

名前はキエフ大公国より

政治制度は大公を君主とする絶対君主制

実態は地方ごとに大公から派遣された人間が行っている

6000年前に始祖ブリミルと戦った『ヴァリヤーグ』の国家であり
メイジは殆ど居ない。

先住魔法を使う人間が少なからず存在している。
ミケーネと同じく平民に軍事訓練を施して『兵士』としているため
平民が非常に強い。

地理

ウクライナ+ベラルーシ+ロシア西部

首都はキエフ

総人口は3200万人ほど

『シベリア』

ルーシ・キエフ大公国よりさらに東に広がる針葉樹林と永久凍土
ほとんど人が居ないので国家も無い。

一部の民族が僅かに住んでいるだけのほぼ無人地帯。

『サハラ』

テフネス国

地理 シリアからイスラエルの地中海側の海岸線付近

首都 アデール

サハラに5つほどあるエルフの国家の一つ。

海岸から離れるとそこは砂漠であり、

食糧不足に悩むことも多々ある。

南側に『聖地』が存在し、

聖戦において主に戦っているのはこのテフネス国である

『東部ハルケギニア』

東部ハルケギニアの特徴は

まず西部に比べて科学技術を多用していること
また、少ないながらも先住魔法を使う人間が居ることである。

中国

ハルケギニア最大の国家で、メイジなどどこにも居ない。
周辺国を属国として従えているが、いくつかの完全独立国が存在する
日本列島に関しては『亜人が多い』という理由で上陸していない。
中国の名前の由来は『世界の中心の国』だからだそうだ。

人口は3億人を超えとも言われているが不明。

首都は長安

ラーンナー王国

地理的にはタイとその周辺

中国との戦争を繰り返しており
中国周辺の数少ない完全独立国である
人口は2100万人ほど

首都はバンコク

ムガル帝国

地理的にはインドとその周辺
宗教的理由で『聖地』への進軍を何度も行っているが
毎回敗走している。
中国も参加したことがあるが、近年はムガル帝国のみで行うことが
多くなった。

人口は2億を超えていると言われているが正確には不明

首都はデリー

高句麗

地理的には地球の中国で言う東北地方
満州国だったところより北の地域である
正確には国家ではなく、民族が発生させた社会集団である

蒙古

モンゴル。

高句麗と同じく国家ではない。民族集団である。
中国からは最大の脅威と見なされている

日本国

『日出づる国』こと日本である

ハルケギニアにおいての日本列島は大量の亜人に占拠されており、
他国の入植者を寄せ付けなかった。

ハルケギニアでの日本国は宇宙からの入植者であり
他国に比べて遥かに超越した技術力、科学力を持つ。

政治制度は立憲君主、議会・大統領制である
総理大臣でない理由は、絶対的拒否権が存在するという一点のみで
ある。

君主はもちろん天皇であるが、ハルケギニアには居ない為、立憲君主制とは言えない。

首都は新東京市

総人口は1000万人

各国家詳細（後書き）

5つの国家だったのが一気に増えましたね。一覧にすると

トリスティン王国

ガリア王国

帝政ゲルマニア

アルビオン王国

ロマリア連合皇国

クルデンホルフ大公国

ミケーネ国家連合

都市国家イスタンブール

キエフ・ルーシ大公国

テフネス

中国

ラインナー王国

ムガル帝国

日本国

滅茶苦茶増えましたね。

まあ西と東で分けられるんですが。

一章 一話 ハルケギニア

大陸に派遣された調査団のもたらした情報は
日本に大きな衝撃を与えた。

「魔法・・・だと？」

「そんなバカな。物理法則が変わったと！？」

学者は口々に言う

そう。ハルケギニアには魔法があったのだ。

地球において19世紀ごろまでには殆ど信じられなくなった魔法。
創作物の世界でしか存在しない魔法。

何でもできるものから

かなり大きな制約がかかるものまで。

ただ、それらには共通する事がひとつだけある。

『ありえない』

魔法が存在すると

宇宙のほうそくがみだれる！

ので、人類には理解しがたいし、

特に知らないことを知ろうとする学者連中にはさらに理解しがたい。
科学的に観測してみるしかないのだ。

近頃驚きっぱなしだったので
さして驚かなくなっていた学者達ですら
この有様だ

学者は何も言うことが出来なかった
数千年前に「迷信」で終わった作り話が実在している

だが地球によく似た・・・どころかほぼそのままの星がある時点で
おかしいのだ

ある一人の学者が言った

「だがこれで今までの幾つかの未知の現象は説明できる」
「亜人のことだな。」

『亜人』

この第三惑星において人類の天敵となる『人類によく似た何か』で
ある

現在日本列島において4種類ほどが確認されている。

おそらく進化の過程で分岐し、それが残った形と予想されている。

ただ、この『亜人』が、進化過程で分岐したにしては遺伝子は人類
に対して大きな差を示しており、

地球尺度で考えれば、サルよりも前から分岐進化していることにな
る・・・が

見た目は人間に似ている（ほぼ別物の種類もいる）

意図的に人類を襲う傾向にあり、西部ハルケギニアの人間が恐れて

いることのひとつ。

これにより人類の生存権拡大は阻害され、アフリカ中南部、南北アメリカは、ほぼ無人地帯である。

その他にも地中からの多めの放射線、地球では『物理的、生物学的に無理』と言われた生物たち、物理的に共存できないはずの二つの月

他にも謎の現象は数えられないほどある。

魔法があるならそれに関連することなのだろうが、誰も説明できなかった。

今の時点では。

大統領と書かれた席の男は言う

「だが未知の現象や未知の技術系である以上、解析や研究は不可欠ここに『魔法省』の設立を宣言します」

学者の眼の奥が光り始めた

地球では研究する内容があまりなくなりつつあったが、ここには未知の現象がいくつも存在する

わからないなら解明する必要がある

理屈にする必要がある

それが科学なのだ

彼らは研究意欲に燃えていた

わからないことを見つけるとすぐ飛びつく

それが科学者なのだ

そうして未知の技術体系「魔法」を研究する省庁、「魔法省」が設立された

生物や地質は国土地理院や環境局があつたので別として、人間が扱う「魔法」に関する研究が始まつた日である
そしてこの日。早速ある論文が学会に上がった

未知の現象である

西部ハルケギニア地上からの

電磁波に規則性を発見したというものだ

詳細は未だ研究中であるが、魔法に関連している可能性は高いと主張する。

その規則性というものは

いくつかの波形パターンに分類可能で、その数は50以上に上ると言う。

一方、東部ハルケギニアに関しては誰も議題に上げなかった。
まさに中国そのままだったからだ。

皇帝は面会早々『朝貢国』になれ。だの
『ならば戦争だ』だの言っていたらしい。

ただ、ライフルを使って見せた途端、
『それ売ってくれ！金ならいくらでも払う！』
と態度を一変させたそう。

日本に関しては

『あの島々は亜人が多くて行けたもんじゃないだそうだ。』

中国を含むアジア・・・いや、東部ハルケギニア大陸では西部のように魔法は殆ど存在せず、

科学技術で亜人やエルフと戦ってきたらしい。

ただ、数学の進歩速度はかなり遅いようだ。

古代ギリシャがどれだけ異常な速度で数学を発達させて行ったかがよくわかる。

一方、日本の一般市民の反応はというと・・・

経済のほうに関心が行っていた。

もちろん社会学者や経済学者は当然そっちである。

東西ハルケギニア共に、通貨制度は

当然ながら管理通貨制度であるわけ無く、

金貨制度で、金本位制に至るのにはかなり時間がかかりそうだ。

問題なのは西部、東部共にその経済体質だった。

西部に関しては貴族が土地の所有を国王から任命され、その運営を行う・・・というものののだが、

貴族は平民からの搾取が容易となり、
金を集めすぎると、どうなるか

日本人は知っていた。

西暦2020年頃、第二次世界恐慌の果てに、

あらゆる資本、投資家等は収入の半分を税金として出すか、
一定期間内に消費しなければならぬという法律が各国で出来上がった。

金があるところに金が集まるのは当然なのだが、それを解消する手段は

税金から消費に変わりつつあった。

勿論消費というのは次の投資でも、金融資産でも問題ないが、
それを売却したときの半分が、また税金が消費するかが要求される。

また、死後相続に関して言えば現金しか認められないようになり、
物を相続するときは一度現金化する必要がある。

『金を使わない金持ちは悪』という社会が世界的に出来上がった。

一部の国はそうでもなかったが、そのような国は経済が停滞し、滅びていった。

そして、西部ハルケギニアではそれが実際に発生している。

大半の貴族は殆どを消費し、一年越しの金はあまり持たない主義の貴族が多いようだが、

各国の一部の貴族、そして大商人はそうは行かなかった
延々と溜め込んで、貯め続けている連中もいるのだ。

これに関しては東部も同じだった。

しかもこの世界には『投資』だの『金融資産』だのという概念が無い。

延々と貯蓄が増えていくだけなのだ。

しかも、それを止める術が誰にも無い。

調査団からの初の報告から1ヶ月後。

西部における金貨および銀貨の流通量とそのうちの貯蓄率が報告された。

金貨と銀貨の流通量の差は1:22で、法定比が1:100である
のと比べると、

どこまでお粗末な経済なのかすぐに予想ができる。

そして、その内7割が既に貯蓄されていることが判明した。

東部は流通量が1：12

法定比が1：20

そして貯蓄が4割。

流石に数百・・・いや数千年分のことはある。

経済だけで見れば滅びるのは完全に時間の問題だ。

現代の国家とは完全に事情が違う。

ここは金貨で取引する世界なのだ。

金貨と交換できる貨幣も

金と交換できない貨幣も存在しない。

市場にまったく通貨が流れなくなる。

それは経済の死、ひいては国家の死を意味する。

あらゆる物が動かせなくなり、その上

他のモノで代用しようにも人々は信用しない。

通貨とは信用そのものなのだ。

・・・少なくとも地球においては。

そして、解決法も無い。

最悪なのが価値が変動しないこと。

西部に関して言えば連金して作れるかもしれないが、そんなの微々

たる量だ。

市場から『金貨』自体が消える。

だが、それを解決する方法は、誰も知らない。
日本も干渉しようが無い。

これは、経済で攻めつつ東西共に変えていくしかなかった。

こうして、
日本の方針が決まった。

一章 一話 ハルケギニア（後書き）

移民船団の主な目的は

『人類の種族的な繁栄の永続、
文明の継承、繁栄』である

異世界であろうともこれは例外ではない。

まあ科学技術の前に教育機関をちゃんと作らないと駄目なんですよね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7618y/>

大陸の西と東

2011年12月2日15時51分発行